

体育科における「言語活動の充実」への懸念

森 勇示

愛知教育大学保健体育講座

Concern to “Enhancement of Language Activity” in Physical Education

Yuji MORI

Aichi University of Education

キーワード：体育授業、言語活動の充実、対話活動、記述活動

Key Words：physical education, enhancement of language activity,
conversation activity description

1. 問題と目的

学校現場は時の教育言説に忠実に反応する。例えば「自ら学ぶ意欲」(1989年)では、「指導より支援」を重視し、教師が子どもに教えず見守った¹⁾。「生きる力」(1998年)では、「自ら設定した課題を自ら解決すること」²⁾(「生きる力」の代名詞)から「課題解決型学習」が隆盛した。これらの結果か、子どもの運動能力は停滞し、学習カードの文章力が評価され技能向上の機会は減少したとされる。

教育言説への即応は、早計な具現化となって現れる。地域の体育研究会では、体育授業に「話し合いタイム」「アドバイスカード」を導入したと報告される。その成果として「子どもたちの話し合いが促進された。」「アドバイスを送るようになった。」と必然の帰結に至る。その報告には運動技能に関する結果が示されていないものもある。このような早計な反応は教育目標を損なう。本稿では「言語活動の充実」³⁾が体育の目標を侵害することを危惧している。

「言語活動の充実」に関する事項は、中央教育審議会答申の中で、知的活動だけでなく言語を「コミュニケーションや感性・情緒の基盤」ととらえ、いわゆる実技教科では「体験から感じ取ったことを言葉や歌、絵、身体などを使って表現する(音楽、図画工作、美術、体育等)」、「合唱や合奏、

球技やダンスなどの集団的活動や身体表現などを通じて他者と伝え合ったり、共感したりする(音楽、体育等)」と例示されている。これらの例示からは、「言語活動の充実イコール話し合い活動の導入」ではない、ということが読み取れよう。

中央教育審議会で、この言語活動のテーマが浮上した直接的な原因は、OECD加盟国による学習到達度調査(通称PISA)の結果によるものである。PISAの調査は国語・数学・理科の3科のペーパーテストで行われる。その調査の中で、我が国の平均点が経年的にみて低下している事実が示され、特に読解力の低下が問題提起された。この問題を、読解力に加えて、思考力・判断力・表現力にまで拡げて解釈した結果、各教科における「言語活動の充実」を主張するに至ったのである⁴⁾。したがって、このような「言語活動の充実」を実現するための対策は、「ペーパーテスト」を「机上で解く」場合には、「問題文」を読んで、「机上でどう考えるか」の対策になる。

それでも、すべての教科においてこの対策が要求された。体育の学習に至る言語活動がないわけではない。運動指導に言語は必然である。体育において「話し合い」より「学び合い」⁵⁾、「聴き合い」⁶⁾が学びを促進するとの主張もある。これらは、学習集団での文化的共同体の形成が「学びの共同体」になるという主張である。

では、体育授業の共同体とは何か。また、その

在り方をどう考えていくべきであろうか。

テニス⁷⁾は、社会における共同体の在り方を「ゲメインシャフトーゲゼルシャフト」の二態に区分している。これらは、共同体ー機能体としての性質をもつ。この区分で考えると、学級集団は共同体であると理解され、学習集団は機能体ととらえられる。体育授業は「目的追求行為」であるため、体育の学習集団は「学習目的を追求する集団」である。この体育の学習集団の母体は学級だとしても、そこで営まれていることは学習行為そのものに及んでいる限り機能体とみなされよう。

以上をふまえると、体育科における「言語活動の充実」の実現には共同体の中で行われる言語活動だけでなく、学習目的を追求する機能体としての言語活動を考える必要があると言えよう。その視点から、体育科における「言語活動の充実」に次のような懸念をしている。

早計な教育言説の解釈から、記述活動や対話活動を安易に導入し、単に共同体としての言語交流があればよしとする考え方。そのことによる運動学習の抑制が、体育の学習に機能せず、結果として教科の目標を損ねること。

この懸念を主題として、本稿では「言語活動の充実」に関連するテーマを掲げた事例にこの問題点があることを指摘し、その改善策について検討する。以上が本稿の目的である。

なお、事例についてはWeb上で公開されているものからテーマに則って選ぶこととした。

2、「言語活動の充実」をテーマにした事例

2-1、事例1

「コミュニケーション能力を高める体育学習の在り方ー学びへの意欲と学びの質を高める言語活動を中心にー」⁸⁾

この事例では「話し合いのルールカード」「技能確認カード」「アドバイスカード」のカードを用いた言語活動を紹介している。これらの使用が学習意欲の向上、知識や技能の習得に至ったかを検証している。

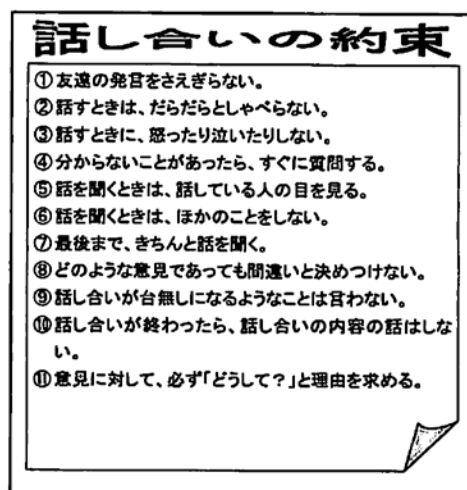


図1 話し合いのルールカード⁸⁾

図1は「話し合いのルールカード」である。その内容は11項目からなっているが、どれも体育に固有の話し合いのルールではない。むしろ特別活動の領域における学級会の指導内容である。これを小学校6年生のバスケットボールの授業で使用している。検証の結果は、子どもがどの項目のルールを意識したかなどを割合で示している。その肯定的な結果として、話し合いのルール遵守やアドバイスの効き目が示されている。ただし、バスケットボールの学習としてのゲームパフォーマンスに関する成果は不明である。

「技能確認カード」は中学1年生バレーボールの授業で用いている。これは、パス・サーブ・スパイクの技能ポイントが記されたカードである。これを4人グループで練習時に提示しながら話し合う活動として組み込まれている。そのため、話し合いは必須になる。成果には、子どもの感想とアドバイスへの意識が示されている。子どもの感想が技能的表現になったと、関心の変容が分かるだけとなっている。アドバイスが技能向上に役立ったとの回答は43%と半数を超えていない。それでも、アドバイスによって技能向上に至ったとの回答が70%と矛盾した結果になっている。技能向上がアドバイスによってなのか、他の理由によるものかは子どもの主観からは決められない。

他に、小学校5年生のハードル走の授業で「アドバイスカード」と「話し合いのルールカード」を併用している。その中で学習経過に伴いアドバイスが具体的になったと報告している。事後調査でアドバイスが促進されたことや技能向上へのアドバイスの効果を報告している。これもアドバイスによる技能向上なのか他の活動の成果なのかは子どもの主観によりけりである。

この事例では話し合いやアドバイスが計画上必須であり、その使用や促進は必然的帰結になる。授業の成果を考えると、「技能が向上した」と子どもが回答しても、それが事実かどうかは結論づけられない。

2-2、事例1への提案

話し合いのルールは全教育活動を通じて定着させたい。これは目的手段論の問題になる。教科が手段で言語活動が目的なのか、あるいはその逆なのか。

体育には、競争や協同などの対人的軋轢を伴う場合が多い。そこには、感情的なトラブルを話し合いによって解決する可能性をもつ。したがって、ルールの提示・遵守の要求よりも、トラブルとその解決を実体験によって学習させることを提案したい。

技能ポイントの資料やアドバイスは言語情報として学習者に提示される。言語情報は学習者の志向性を左右し、志向性を焦点化する。そのため、言語は運動時に自分の身体部位に留意することや、外部状況へ注目する点を定める。例えば「アゴ」と言われてあごを引く姿勢になったり、ボールゲームで送球方向が捕球前に伝われば迷わず送球できる。

これらの成果が「技能的表現が増えた」とか「アドバイスが促進された」では、運動学習の成果として不十分である。むしろ、技能ポイントやアドバイスが運動時どの留意点に至ったかを問うことを提案したい。

2-3、事例2

「保健体育科実践事例」 中学3年生バレーボールの授業⁹⁾

この事例では「重視した言語活動」として以下の3点をあげている。

- 相手の動きを見て、技能を高めるための助言を考えて発する。
- チームの課題、自分に適した課題解決のためにどうすればよいか話し合いをする。
- 教え合ったり、励まし合ったりなど、チームの雰囲気をよくするために積極的に言葉を発する。

それぞれ技能的助言・話し合い・励まし合いになる。学習の中核的課題に「三段攻撃の習得」を掲げ、図2のようなワークシートを話し合いで活用することとなっている。

【ワークシート⑥】

バレーボール ～三段攻撃編～	【振り返りカード】
月 日 ()	チーム名 ()
失敗には原因がある。成功には過程がある。 三段攻撃をゲームで成功させるためにしっかり話し合いをしよう！	
(1) ゲームにおいて三段攻撃はできましたか？ (例) 1本だけ決まった できなかった など	
(2) (1) でできたという回答の班に・・・成功の秘訣は？ (例) いいトスが上がったから など	
(3) (1) で、できなかったという回答の班に・・・成功するためには？ (例) トスを高く上げる など	
(4) 三段攻撃をより成功させるために必要な声かけとは？	

※ポジションの変更もOKです！

図2 ワークシート⁹⁾

この事例の授業成果は報告されていない。指導上の留意点には「どのようにすれば、三段攻撃がうまくいくかの解決案を考えさせ、発言させる。」とか、三段攻撃を成功裡に履行する話し合いをワークシートを参考にして行うことが記載されている。

この事例のように「はじめから三段攻撃ありき」ではゲームの勝敗をめぐる学習課題が不明確になる。それでも、図2のワークシートを使用すれば、

その話題に基づく話し合い活動は必然的に生じ、それをもって言語活動の充実となるのだろうか。

2-4、事例2への提案

バレーボールの実践で三段攻撃を求める教師は多い。現状ではボール操作技能の未熟さから効果的な授業になっていない。球技の学習はゲームの勝敗をめぐる判断の学習であり、技能の行使はその手段になる。事例では技能向上の練習に助言を生じさせることを考えている。バレーボールのオーバーハンドパスのために「手で三角形をつくる」「ひざを曲げて構える」などとよく言われるが、ボールタッチ感覚は手や脚の形状を守れば習熟するというものではない。多くの子どもたちは困難を極めているのが現状である。

そこで、この事例には次のことを提案したい。一つは、「得点を取り相手に勝つためにはどんな返球が有効か」を主題にゲームの反省をもとに話し合う。二つ目は、そのためのボール操作技能を準備運動の中で習熟させる。計画の中にある「ラジオ体操」「補強運動」は割愛するべきだと考える。

2-5、事例3

言語活動の充実で、「言葉の力」を高める各教科等の指導の工夫（体育、保健体育）¹⁰⁾

この事例では「体育カード・ノート」の使用を習慣化するとある。表現活動を充実させるポイントに、①振り返り時間の確保②自己評価の精選③短いコメントで評価、の3点を提示している。さらに、グループ・チーム活動を充実させるポイントに①練習選択や作戦立案を子どもたちで②教え合い時間の確保③発表の場の設定、の3点をあげている。

これらは対話活動・記述活動の導入であり、そのための時間確保に言及しているに過ぎない。

体育科でのアイデアに「作戦板を使って話し合い活動を！」と例示され、作戦板の使用が話し合いを活発にすると説明している。作戦板活用のポイントに①作戦と自分たちのめあてとの合致②話し合いの賞賛③作戦板への自由な操作(書き込み)④使用時間の確保、の4点示されている。体育の中で運動の技能の目標を達成するには、①が機能するかが重要である。ところが、作戦板上の作戦

は巧いかわからないことが多い。なぜなら、ボール操作技能の未熟さ、対戦相手の想定外の行動、対戦相手との相対的力関係などの理由で成功裡な作戦の遂行が妨げられるからである。

2-6、事例3への提案

対話活動・記述活動の導入のための時間確保では「言語活動の充実」に至るかどうか定かではない。作戦板も使用すればいいというだけではない。これらの活動が機能するには、運動学習の水準を考慮する必要がある。運動経験の積み重ねが不十分な状況では、子どもの課題意識は希薄である。その状況では、子どもは対話活動・記述活動、作戦板などの必要性を感じない。そのため形式的な話し合い・記述、作戦板の使用に至る可能性が大きい。

そうならないために、教師自身が技能を理解する必要がある。運動観察を子どもに要求し教え合いを促進するには、教師自身の運動観察眼が問われる。「何を」「どこを」見るのか分からなければ教え合いは低調になる。仮に、効果的になったとしても子どもの偶発的な発見が妥当な助言になることを期待することになってしまう。

個人的運動技能を見る場合、焦点化された運動形態を視点としたり、技能習熟を形態的差異として気付かせることが必要だと考える。球技・ボール運動のゲームを見る場合、ゲーム様相の発展過程を考慮すべきである。ゲーム様相はボール操作技能と認識形成(状況判断)を要因として現れる。ボール操作技能の未熟さは作戦板では補えない。認識形成は作戦板上の立ち位置を知るだけでなくプレイ意図をとまなう。そのため、どんな意図でプレイするかを話し合いのもとに合意させてゲームに臨むべきである。

2-7、事例4

「思考力、判断力、表現力を高める体育科教育の学習指導過程の工夫―課題解決場面での言語活動の充実を視点に―」¹¹⁾

この事例は言語活動と運動量・活動量のバランスを考慮した実践である。その基本的な考え方を図3のように考えている。

図3の通り、この事例では言語活動を目的とせず、体育の手段ととらえている。実践は小学校5年生走り幅跳びと中学校1年生バスケットボールの授業である。

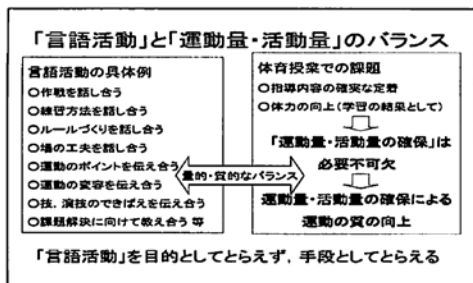


図3「言語活動の充実」と「運動量・活動量の確保」

走り幅跳びの授業成果として、測定平均 (図4) と態度測定の平均 (図5) を表している。ここで、走り幅跳びの記録向上と友だちとの教え合いに相関関係があるのではないかと推察をしている。これは統計的な相関係数に基づいたものでなく、仮に相関関係が認められたとしても、相関関係は因果関係ではない。第8時の平均記録が最大値でも、態度得点は微増であり、記録向上に別の要因があることが示唆される。記録向上は運動課題の遂行からなると考えると、教え合いは課題遂行のきっかけになるものの、課題解決の実行ではない。

バスケットボールの成果はゲーム中のシュート数・成功数 (表1) と態度測定 (図6) の平均が提示されている。

この報告の中で、第4時の学習課題「スクリーンプレー」がシュート成功数に結び付かず、それを学習意欲や教え合いの態度得点の低下との関係で述べている。バスケットボールの学習課題に、そもそもスクリーンプレーが必要であったか疑問が残る。スクリーンが機能するにはディフェンスがマンツーマンディフェンスの原則通りついてくれることと、スクリーンを使用した結果できたショットチャンスにパスが成功する必要がある。これを体育授業で成就するには相当な困難が予想され、決して話し合いで解決することではない。



図4 走り幅跳び測定値平均 (cm)

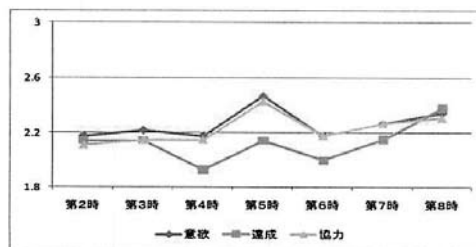


図5 形式的授業評価得点

表1 ゲーム中のシュート数・成功数

時	学習形態	学習課題	シュート数	成数	成率
第1時	3on3 コート	カットイン	42	7	16.7%
第2時		カットイン	39	9	23.1%
第3時		スクリーン	44	5	11.4%
第4時		ポスト	32	10	31.3%
第5時	5対5 コート	ポスト	42	10	23.8%
第6時		チームの作戦	46	9	19.6%
第7時		チームの作戦	40	8	20.0%
第8時		チームの作戦	40	7	17.5%
第9時	コート	チームの作戦	38	10	26.3%
第10時		チームの作戦	38	10	26.3%

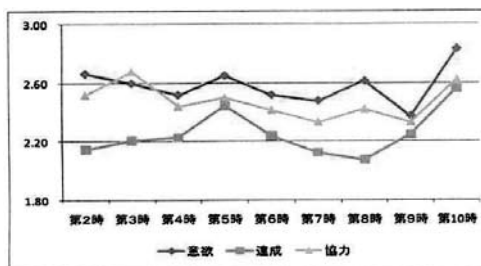


図6 形式的授業評価得点

以上のような、言語活動と動作習得との関係は相関関係の可能性を示唆するにとどまり、因果関係を論じるには至っていない。

2-8, 事例4への提案

走り幅跳びの中核的技術課題に、助走の勢いを

生かした跳躍への転換がある。助走のリズムが乱れれば勢いを生かせない。リズムは運動する本人が自得するものである。ただし、リズムを擬態語で表す場合が考えられる。その特徴や変化について、観察者が擬態語を使用して伝える場合、技術的課題を想起できる可能性をもつ。

バスケットボールはゲームにおいて判断の学習をする。判断は視野に収まる状況の確認を伴い、視野には見る順序がある。その順序の先取りを言語によって予め伝えることは効果的だと考える。

3. まとめ

事例の中には、「話し合い時間の確保」「教え合いの促進」「記述のためのカード・ノートの使用」を手段とする対話活動・記述活動の導入があった。これは1項で懸念した本稿の問題である。この中には言語活動の単なる形式的導入になっていると考えられるものがあった。他に、技能向上の成果を示している事例もあったが、それが言語活動によるものかは定かではなかった。

これまで検討した事例の内容の問題点と改善の提案をまとめ以下に示すこととしたい。

①手段—目的関係の再検討

対話活動・記述活動の導入で「言語活動の充実」に至り、その結果「話し合いは活発になった。」というのでは、言語活動が目的になり、体育はその手段になる。これでは教科の目標は損なわれる。事例の中には「言語活動は手段」と定義しているものもあったので、この立場を支持したい。

②言語活動と運動技能との関係

言語活動が運動技能を向上させる学習に機能しなければ、教科の目標は損なわれる。事例には運動技能の成果を示しているものもあったが、それが言語活動の機能を保証するものでもない。

技能をテーマとする「話し合い、教え合い」には運動観察をともなう。「学習カード」は運動の省察を促す可能性をもつ。このとき、観察や省察のフレーム形成が重要になると考える。運動の「何を見るか」を定めることは観察・省察のフレーム

形成になる。子どもにこれを求める場合、教師自身がこれらを学習指導できねばならない。

③評価の観点との関係

言語活動の導入が体育の目標を損なうことを懸念した。しかしながら、体育の目標は技能だけではない。教科の目標は評価の観点に準拠する。それは観点別評価規準の適用になる。周知の通り、体育の観点別評価規準（小学校）は運動の技能だけでなく、運動への関心・意欲・態度と運動についての思考・判断がある。思考・判断の評価規準は課題の設定や運動の計画、反省などを評価する規準である。そのため、授業でこれを対話活動・記述活動で行うと考える教師は多い。それでも評価規準の確立が曖昧で、話し合いの活発さ、学習カードへの記述量で評価するケースもある。したがって、「言語活動の充実」に至るための評価の観点を確立することと、実践との関係でその具体的活動を再考する必要がある。

4. 文献

- 1) 荻谷剛彦 志水宏吉 清水陸美 他:「学力低下」の実態, 岩波ブックレットNo.578, pp1-10, 岩波書店, 2002
- 2) 上掲書, pp5-6
- 3) 中央教育審議会: 言語活動の充実について, 文部科学省ホームページ, 2008 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/meeting/080612/006.pdf (Accessed JAN, 30, 2013)
- 4) 文部科学省: 言語活動の充実に関する基本的な考え方, 文部科学省ホームページ, 2010 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/newcs/genngo/1300857.htm (Accessed JAN, 30, 2013)
- 5) 佐藤学: 体育の授業における言語の学び, 体育科教育 59 (11): p9, 2011
- 6) 岡野昇: 体育における言語活動の“落とし穴” — 体育における「聴き合い」としての学び, 体育科教育 59 (11): pp. 20-23, 2011
- 7) F テニス著: ゲマインシャフトとゲゼル

- シャフト—純粹社会学の基本概念—(杉之原寿一訳), pp16-119, 思想社, 1954
- 8) 川崎市総合教育センター研究紀要22号: コミュニケーション能力を高める体育学習の在り方 pp81-96, 2010 www.keins.city.kawasaki.jp/kiyou/kiyou22/22-081-096.pdf (Accessed JAN, 30, 2013)
- 9) 大阪市教育委員会指導部: 言語活動の充実を図る実践事例集, 2011 <http://www.ocec.jp/shidoubu/index.cfm/8,2073,93.html> (Accessed JAN, 30, 2013)
- 10) 北九州市教育委員会: 子どもの未来をひらく「わかる授業」を目指して, すべての教師のための授業改善ハンドブック, pp70-71, 2010
- 11) 熊本県立教育センター: 確かな学力を基盤とした「生きる力」をはぐくむ教育の創造—思考力、判断力、表現力を高めるための各教科等での言語活動の充実—(体育、保健体育) 研究紀要第38集, 2009